

映画の小箱

これは2人の少年の友情物語である。気の弱いマックスは難病持ちのケビンに勇気を学ぶ。やがて2人は本当の騎士になっていく――。

『マイ・フレンド・メモリー』

心やさしき少年騎士
2人が描く友情物語

体は大きいが気弱な少年と、彼の隣に引越してきた、頭はいいが病弱な少年との友情物語である。この二人の出会い、触れ合い、葛藤、そして友情、誰にも負けない絆。そこには、大人になると失いがちな、勇気や夢や行動や創造、ユーモアやエスプリが、なにより自由さが、満ちあふれている。見ているうちに、力強い夢みる力といったものが、体にもるみるみなぎってくるような、そんな気分になせられる。

少年時代、夢想する自分たちだけの世界があった。いつも英雄になれたし、空も自由に飛ぶことができた。つねに創造に満ちて、遊ぶことはそのまま、すべてが自分たちのものだった。そんな爽快な気分を喚起させ、たっぷり味わわせ、楽しませてくれる。たとえ小さくとも、自分を信じることの素晴らしさを教えてくれる。

主人公のマックス(エルデン・ヘンソン)は、中学一年生。祖父のグリム(ハリー・ディーン・スタントン)と祖母グラム(ジーナ・ローランズ)と暮らしている。体は大きい、学校の成績はさっぱりだし、何かにかかわるといじめの対象になるので、いつさい自ら行動を起こさない消極的な少年だ。

そんな彼の家の隣にケビン(キーラン・カルキン)が引っ越してきた。ケビンは機械の

金丸弘美=文

text by Hiromi Kanamaru



鳥を庭で飛ばして、マックスを驚かせる。

翌日マックスはケビンと学校で再び出会う。体育館でバスケットをしていると、ケビンが松葉杖でやってきた。そのとき不良少年のブレードが、わざとバスケットボールをケビンにぶつけて転ばせた。それに気づいた先生が咎めると、ブレードはマックスのせいにした。マックスはなにも答えられない。

床から起き上がったケビンは、マックスの方を見て、どんな卑怯なことかを正面きって告げると、体育館を去っていった。その毅然とした態度にマックスは啞然となる。

カーニバルの日、マックスは、隣のケビンの母(シャロン・ストーン)に、ケビンとカーニバルに行ってくれるように頼まれる。実はケビンは母子二人暮らしで、彼自身、重度の難病にかかっていることを知る。

マックスとケビンはカーニバルに出掛けた。火花を見ているうちにマックスはケビンが人の陰で火花が見えないことに気づく。肩車を

してあげるとケビン喜び、その火花がなんの薬品なのかをすべていい当てて、マックスをまたまた驚かせた。

そんなとき、不良少年のブレイドと仲間がやってきた。それに気づいたケビンはマックスに指示を出す。「右に逃げる」「次は左だ」「勇気を出せ。僕たちは騎士だ」。マックスはケビンを肩車したまま走りだした。

マックスは不思議な気持ちになり、自分に本当に勇気があるような気分になる。最後は川に逃げ込んで溺れかけもしたが、巡視のパトロールに助けられ、不良仲間を振り切った。家に戻ると、ケビンの母に褒められ、祖父に勇敢さを讃えられた。マックスは初めて自分が認められた気分を味わった。

こうして二人の友情が始まった。

ある日、ケビンは不良たちが街頭で女性のバッグをひったくりマンホールに投げ込むの



を目撃。ケビンはマックスを夜中に誘い、バッグを探し、中に入った免許証を頼りに持ち主に返すことにする。ところがその持ち主の

同居人は監獄にいるマックスの父親の知り合いだった。マックスは凶暴な父に似ていると言われる。マックスは傷ついた。彼は父親に対して憎しみでいっぱいだったからだ。よいなことをしたケビンに腹をたてる。

そんなある日、マックスの父親が仮釈放され監獄を出て、なんとマックスを無理やり連れてマンシヨンの一室に閉じ込めてしまった。祖父も祖母も驚き警察も動きだした。そのとき勇敢にもマックスを助け出すべく救出に向かったのは、ケビンだった。

ケビンとマックス。この二人の友情の交感の、なんとドラマチックなこと。いちばん素敵なのは、ケビンが自分たちを騎士になぞらえて、アーサー王の伝説にちなみ、マックスを励ますところだ。

難病にかかっているが、つねに前向きさを忘れないケビン。彼に勇気付けられ反発しながらも、次第に潜在した自分の力を発見していくマックス。感動的なのは、アーサー王の絵を張り絵にした白紙の本をケビンがマックスに贈るところ。そこに言葉という絵を描くことをマックスに教える。そしてマックスは二人の友情物語を記すことになるのだ。♪



マイ・フレンド・メモリー THE MIGHTY

(1998年 アメリカ映画)

監督：ピーター・チェルソム

出演：シャロン・ストーン/エルデン・ヘンソン/キラン・カルキン/ジーナ・ローランズ/ハリー・ディーン・スタントン

(松竹富士配給 12月中旬旬刊公開予定)